

<開催日時>平成28年9月24日(土)16:00~18:00

<開催場所>槻の木高校応接室

<出席者>

[委員] 北山茂治 委員、木村 勝 委員、芝井敬司 委員、田中隆夫 委員、
宮坂政宏 委員

[学校] 竹下健治 校長、奥谷彰男 教頭、河嶋憲治 事務長
山本 尚 首席、田中 眞 首席、奥本雅俊 指導教諭、藤田 稔 教諭

1. 学校長挨拶(竹下校長)

2. 座長挨拶(木村PTA会長)

3. 報告・協議

<話題提供1 学校から報告 ①本年度の入試結果について>
(別紙)をもとに説明(山本首席)

芝井委員

冠中学校はよく学校説明会に来ているが、何か原因があるのか?

山本首席

学年集会に呼ばれて話をしに行っている。それが呼び水にはなっている。

芝井委員

極端なことはいえないがすごく目立つなという印象。学校説明会に6回来ていると
いうのはパーフェクトか?

山本首席

そうでもない。年間20回位やっている。

木村会長

圧倒的に高槻市の中学生が多いが、現在吹田に住んでいるが、子供の出身の中学校
からの参加者はいない。確かに中学校の指導で進路の選択に槻の木の名前が出てこな
かった。入試直前までは他の高校を考えていた。実は学校見学なしで受験した。高槻
市以外の地域に対して知名度を上げるための活動は出来るのか?

竹下校長

吹田方面では地域の公民館を使って去年も今年も学校説明会を行っている。それ以
上の宣伝活動はしていないが、年中毎月学校説明会を実施している。槻の木高校自体
の知名度の問題か。これでも高槻市は入学者の50%を切っている。昔は60%程度
の高槻市内からの入学者があった。高槻の子どもたちにとっては槻の木が離れていっ
ているというイメージか?それがどうという問題ではないが、地域に関係なく志願し

ていただけるといのは学校としてありがたいことである。

木村会長

他のエリアから来る生徒も徐々に増えている。一度実績が出来ると、中学校に先生にも槻の木という選択肢が出来るのではないか。徐々に高槻市出身の比率が下がっていくのであろうか？

山本首席

こういう学校があるというのを知ってしまうと、それまでは半信半疑であっても、足を運んでみようかと思ってもらうのが、知ってもらえるチャンスだと思う。逆にそれで本校を知った方というのはなかなか熱心な方だと思う。真剣に進路を考えていたり、教育に熱心であったりとかということになっていくのではないか。

芝井委員

ある大学では学生の中から希望者を募って、夏休みに母校に帰って宣伝をして来てくださいという大学もある。それは少し変な宣伝の仕方かもしれないが、わりと担当の先生や進路指導の先生など関わる先生は中学でもそういう情報をもしかすると欲しがっている。実際に進む前に「これ位だったら行けるよ」とか「こういう特色のある学校だ」と言う以上に、実際進学した生徒がそういう指導をしている先生に「行ってみたけどこうだった」ということを伝えてもらう。強制はできないが。

宮坂委員

槻の木高校は知名度は低いが、槻の木の教育は中学校3年生から始まっているというのは非常に大切である。募集活動とかPR活動というのは一般企業と違って進路指導に繋がる。中学校3年生が進路選択を行うにあたって、進路機会だけでなく教育内容も伝えることを大阪府の通学が可能な全ての中学校に理解してもらうことが、進路指導の一環である。そういうことでいろんな事で成長させる学校があるんですよ、規律正しいところで学習したいという生徒にそういう学校があると伝えることが進路指導の一環になると思う。そういう意味で中学生に対する進路指導を行う必要がある。この学校は時間割も独特であるし、単位制であるからカリキュラムもそうであるし、「そういう学校があるんですよ」と。中学校では単位制の仕組みとか総合学科の仕組みとか先生方は良く理解できているのか？

北山委員

進路指導主事は結構勉強もしているので理解している。そこから先生方や保護者にむけて説明会をしている。

宮坂委員

高槻の中では槻の木がどの辺りにあるのかなど分かっていると思うが、近いところである枚方などはどうでしょうか？吹田では公民館を借りての説明会などされているが、なるべく地元の学校に行ったほうが、近くて良いのではないか。やはりここは特別な学校なので厳しい学校であるというのは、大阪府下中に知っていただくことが必要である。やはり中学生主体で考えると必要である。

北山委員

高槻市内の中学校訪問では高校のほうから説明に来ていただく。私学1校・公立1

校を同じに日に来ていただいて説明していただく。それと出前授業をしてもらう。高校の先生に私学5校から来ていただき、1時間授業をしていただく。これは大きい。来ていただいた学校に進学する可能性はあがる。

宮坂委員

実際に授業を見ることができると。授業公開もやっているのでは？

北山委員

あまりにも近くて、よく見えるということで安心しきっているということもあるのでは？保護者も槻の木の方はよく知っている。それもあり学校説明会の回数も上がらないのでは？保護者や生徒たちから言わすと学校選びの1つとして、まず交通の便の良いところが挙がってくる。それと同時に校風や指導体制などが関わってくる。やはり「近く」というのは大きな要因である。

竹下校長

私も高槻の比率が下がってきているということに対して、もちろん公立なので地域には平等だが、日ごろの生徒の状況を見て「槻の木の生徒になりたい」と感じるのが近くであることの意味だと私は思う。だから近いところから来ると言うことも大事なことである。地域の学校と言うほどではないにしても生徒を見て「来たい」という魅力を更にあげたい。

<話題提供2 学校から報告 ②新入生（14期生）の実態について>

ア) 意識実態など

(別紙)をもとに説明(藤田教諭)

木村会長

後期入試に変わって、来る生徒が変わった。「槻の木高校に入って良くなった」というより、そういう生徒が槻の木高校に来たという感じなのではないでしょうか？それは時々学校にくるPTAでも感じる。お母さん方と接していると感じる。今まで役員をお願いしても嫌々で逃げていたが、立候補をする人も結構居ていた。積極的に何かの活動をするから助けて欲しいとお願いすると手が挙がる。一年生の保護者がいらっしゃる。親子共々やる気満々でこの高校に来たのであろうというのを感じる。これが続いてくれたら良いと思う。この高校に来て一番最初にインパクトがあったのは山本先生である。山本先生が営業部長のごとく、学校説明会もずっとやられて、話も面白く厳しいところは厳しいときちんと言われている。槻の木高校は長くこの学校にいらっしゃる先生方が作って来た形だと感じる。何が心配かということ、先生方が5年10年経って引退した時に槻の木イズムを継承していくのは生徒ではなく先生方だと思う。毎回協議会のテーマに出るが、後進の指導であり、若い先生方に基本的な考え方や色を引き継いでいって欲しい。それに力を入れていかないと、先生方も転勤もあるでしょうし、入れ替わられた時に気が付いたら普通の高校と変わらなくなっていて、どこを見ても槻の木と分からないとなっていないことを願うばかりである。

宮坂委員

今、おっしゃった事は芝井先生と昔から何回も「何年か経って違う学校になっていたよ」となったら困ると言っていた。だからこそこのセカンドステージというものを考えられたのだと思う。いろいろ次々と手をうってこられたと思う。先ほどの話にあった何回も学校説明会をするということに関して、山本先生のような発信力をお持ちの方で20回行ってこうだとするならば、そうじゃない人だったら40回くらい必要。だけどいつまでもやっていたらいいわけではないので、やり方としてひとつは進路指導の先生が中学校や塾の先生に梶の木というのは何なのかを理解してもらう。中学校では学校説明会に何校くらい行くように指導しているのか？

北山委員

公立高校だったら夏前から実施している。今日も実はここに来る時に電車でうちの生徒が二人、どこかの学校説明会に行ったようで、午後からも別のところへ行くというかたちで、電車の乗り換えに走っていた。休みの間はかなりの機会がある。夏休み前から資料提供している。

宮坂委員

そのなかで一番インパクトを持つということだと思う。いくつかの学校を見ていてそんなに知らない学校だったのに、この学校に来たという生徒がいて、そういう生徒にインタビューをして、一番大きくその子を変えたのはその学校に関わってくれた先生、先輩であり「このような先生や先輩のところにいきたい」ということだった。関わりの質を高めると、一回でも進路を変えてしまうであろう。特にこの学校は良い資源を持っているのだから、それをいかに効率的に中学校に注入できるかが非常に大切なことである。単に資料だけをお見せするとか、脚本として書いているものを読むだけとかでなく山本先生のパワフルな側面であるとか「この学校に行けば何とかしてくれるのでは？」と思わせるものである。どちらかと言えばそちらのほうが大切である。そこにいかにインパクトを持たしてやるのが大切である。

<話題提供2 学校から報告 ②新入生（14期生）の実態について>

イ) 学力実態など

(別紙)をもとに説明(奥本指導教諭)

宮坂委員

2ページ目の右下の表「生活と学習習慣」で参考値と書いてあるが参考値というのは突き詰めると難関大学に合格した生徒が高校時代どういう生活を送ったかということなのか。

奥本教諭

そうです

宮坂委員

とくにQ19「学習以外の自宅での過ごし方」では極端に参考値と現状の梶の木高校生の過ごし方が違う。どのように使ったらいいのかは非常に難しいが、これを生で出すと大変面白い。「みんなはこうしているかも知れないけれども、通った子はこうし

ている」と言っても良いのでは？こういうデータを取ることはとても大切で、どこかで返す必要がる。返すところは一番直接的にはこのテストを受けた生徒にとれば、こういう面白いデータでこれからの自分の3年間の学びを考える時に頭の中に入れて生活していくようにメッセージとすれば良いのではないか。我々が見て「今年の一年生も去年と大体同じである」ということも大事である。同時に生徒に対してメッセージを出すところをうまくピックアップして、クラスであったり、学年であったりしっかり指導していただいたら良い。参考値が槻の木 of 順番になっているものを全国のSレベルの大学に合格した学生の順位はどうなっているのかという学習や過ごし方をしたのかや、あるいは身近な槻の木 of 生徒でSレベルはどういう過ごし方をしていたのかを後輩たちへ見せてあげる、あるいは全国のSレベルの人を見せてあげることも参考になるのでは。なかにはそういうものを示されても「私には関係ない」と考えもあるかもしれないが、「自分も頑張ろう」と思う子もたくさんいるのではないか。

木村会長

この参考値の統計を出しているパーセンテージと言うのは同じ年で比較しているのか？

芝井委員

年度はずれている。通った後のものである。

木村会長

スマホの値段がこの1年くらいで一気に値段が下がった。皆が当たり前のように「ガラケー」と呼ばれる携帯から「スマホ」に換えていった時期が完全に数字として出ると思う。どんどんスマホが進んでいてこれが勉強の邪魔になっているのかと考えていけないといけない。わが子も勉強している以外はほぼスマホを触っている。テレビなんかほとんど見ていない。何をしているかも分からないが、これは本校だけの現象とは思わないが一部の学者さんは「スマホを触っていたら脳に悪い影響が出る」といっていたり、電磁波というものもあるでしょうし、今は本校では携帯の持ち込みは禁止にしているが、当然授業中とかはだめにしても、コミュニケーションツールとして定着してきているので、勉強だけが全てではないが、勉強以外でも脳の発達などに影響があったりするのか？最近当たり前のように小学校くらいからスマホを使うので、本当にプラスになっているのかマイナスになっているのか気になる。テレビやDVDを見ている時代からスマホを見る時代が変わったというのが数字として表れている。

北山委員

高校受験に向けての学習の仕方というところで予備校・塾中心が62.2%ということで中学校側としては考えないといけない。授業も一生懸命やってくれているので学力も上がっていると思うがあまりにも塾などに頼りすぎているのではないかと感じる。

山本首席

この1年生と2年生、13期生と14期生では空気が違う。14期生は男女の数が120人120人でいつもより男子が多かった。今の2年生は3対2の割合で女子が多い。家庭学習の時間や要領の良さ、理系が多いということは14期生の男子の数が多いうことに影響している。実は全体像はそこに隠れていると思う。数学が高い

というのもそういうところが少しあるかもしれない。ただ学校としては男女バランスというのはとても重要である。以前は男女で50%ずつだった。その時代ではなくなって男女バランスがどの学校も崩れている時代で、学年として少しやりにくいところがある。数字的に見るとそういうところも少しあると思う。

宮坂委員

学習習慣に関して以前から議論があったと思うが、家庭の意識や保護者の行事へ良く参加しているなどを聞いていて、保護者が学校行事に参加している学校というのは子どもの成績や学校に関心を持っている。保護者が積極的主体的にいろいろ参加したり、学校のことを聞いてくれたりする。そういうご家庭のお子さんは学力が高い。保護者も一体となってより一層やっていただくと良いのではないか。そういう雰囲気になってきているのは良いことである。特に今回一年生で学習時間が「ほとんどしない」が非常に多かったように感じているので、そういうところにターゲットを絞ったら良いのでは。

竹下校長

先ほどPTAでも言わせてもらったが、やはりPTAの活動が活性化した時には学校が伸びる。そういう意味ではPTAの社会見学会への申し込みが100人以上の方が応募してくださったというのは、会長は大変だが学校の伸びしろがあり、動いているという実感はある。

木村会長

ほとんど家で勉強していないのに、成績をきちんと取っているというのは頭が良いということか。授業で消化できている。

山本首席

生徒が正直である。「こう書いた方が先生は喜ぶだろう」といった回答の仕方はしない。でも勉強しなければ成績は伸びない。

<話題提供3 学校から報告 ③学校保健委員会から見る槻の木生の実態>

(別紙)をもとに説明(田中首席)

宮坂委員

18ページの「休養したい」とは

田中首席

「休養したい」という生徒の全部の理由が課題かどうかはわからないが、しんどい時に休養するのは保健室しかないのもそうなる。

宮坂委員

全国平均から見ても極めて高いので。

奥谷教頭

課題の提出状況はどうか。

田中首席

成績会議のときなどに課題の提出状況が悪い生徒の名前が出てくるが、各クラス1

名いるかいないかといった程度とを感じる。概ねまじめにやっている。しかしなかには休み時間に友達のを写しているということもいる。提出状況が極めて悪いとは感じていない。

奥谷教頭

それは今までとは違う傾向にあるのか。課題の提出率など。

藤田教諭

だいたい真面目にやるので、特に1年が悪いとかはない。出さなければいけない時に出していないのは1人いるかいないくらいで、こうなるとサボれない。

奥谷教頭

作業量はどの程度かかりそうなものなのか。

藤田教諭

そんなにいっぱいではない。以前に担任をしていたときはもっと量が半端じゃなかったもので、月曜日には大変な状況があった。今の生徒は適正な量で、やる子は内容をきっちりとする。一度間違えた問題に色を変えてもう一度取り組んでみるなど、成果に繋がるかは別問題であるがそういう生徒もいる。逆にいい加減な課題の取り組みで点を取ってくる子もいる。そんなに変わらないがより真面目になっている。

芝井委員

18ページの「理由別利用状況」がうまく比較が出来ない。例えば「呼ばれたから」というのは何か分からない。いろんな事で気になるので先生が呼び出す声がけをした場合は理由別利用状況に入れていいのかどうかという問題がある。あるいは「その他」というのは「スポーツ振興センター手続き」や「借り物」「提出物」などとなっているが、これも「保健室利用」と言えるのかどうか。ここから何か読み取ろうとするならば区分けをした方が良い。あと、21ページから薬物の問題になるが、大学で一年生にアンケートを取ると「高校時代から薬物に手を触れる機会がある」という子が一定の%以上いる。高校の調査はどちらかという意識調査が多いが、大学でとっているのは露骨に「近くで手に入るかどうか」あるいは「使っているところを見聞きしたことがある」といった項目まで入っている。それがパーセンテージで言うと1%以下ではなくて2%くらいの数字が出てくる。少し気にしておかれたほうが良い。去年で言うと京都では中学生が使用した。ああいうことが起こりうる。アンケートの取り方とか具体的なことはいえないが、現状はおそらく生徒さんの中には「自分は使ってないけども、知り合いで実際にあったようだ」みたいなものは聞いているというものを含めて接している生徒がいる可能性がある。気をつけておかれた方が良い。

奥谷教頭

府教委から年に1回、学校以外の専門家から講習を必ず受けるよう義務付けられているが、芝井先生がおっしゃったようなアンケートはないです。これから必要になってくる時代ですね。

木村会長

昔、覚せい剤は暴力団が扱うようなものだというイメージだったが今は違う。ネットでやり取りというのは素人の人間が売買に関わっている。スマホで簡単にネットシ

ヨッピングが出来る時代なので本当に恐ろしい。ただこれもPTAや親、家庭から子どもの様子を見ていたらおかしかったら気が付くのでやるべきことで、先生方がと言っても学校にいる時以外は見られないのでPTAの課題として考えていかなければいけない。

<話題提供4 学校から報告 ④NEXT STAGE 経過報告>
(別紙)をもとに説明(山本首席)

宮坂委員

オーストラリアの海外研修は日数がどれくらいでいくら位かかるのか?

山本首席

10日間で30万円。タイが5日で6万円。オーストラリアに行きたかったけどタイにするということもあって17名の生徒が応募した。

宮坂委員

私学などで聞くと先生方が業者さんと事前に打ち合わせをきっちりされて、プログラムを学校が作って、現地で業者さんが教育効果も高いプログラムをやってくれるというのがある。先生方の負担も非常に減りますし、事故などがあつたときに業者さんが現地にエージェンシーを持っていて非常事態に対応してくれる。それでオーストラリアにしたら3週間で40万円。そういう話も聞いたことがある。中身も単に語学研修ということではなく現地の方と交流したり、体験であったりというプログラムも出来ますよという。学校で先生がうちの生徒にはこういうプログラムが良いというのを作られ、先生方の負担も減りますし、何よりも事前事後研修もしっかりしてもらえというのを聞いたことがある。そういうところを参考にして先生方の労力を減らしていただいて、むしろ中身のほうに投入していただいたらいいのでは。それから東京研修は面白い。東京でないと出来ないことって結構ある。18歳選挙権に向けて国会の見学や、政党の見学、本庁や模擬国会など、東京でしか出来ないことをするのは良い。これから社会科の『公共』というのが入ってくるがそれに対して何かやる。これから選択肢がどんどん増えていき、先生の言葉通り非常に面白い。それと大学とやるときには是非「学術」という本質的な部分と呼ばれるものを多少高度であっても触れていただくというのには良い。子供っていうのはちょっとした機会を得ることで大きく変わるので。5年後10年後が分かるようなネクストステージであるはずなので。

芝井委員

田村哲夫さんという渋谷学園幕張高校を創設した人の本を読んだが、すごく面白くて、修学旅行を国内で始めたが、現地集合現地解散で行っている。「皆さん良く調べて何月何日に駅に集合しなさい」と。そこからは先生がいる。それは何回か行って決着したのであるが、外国に修学旅行に行って同じように現地集合現地解散にした。ところが次の問題が出てきて、うまく準備をすると彼らが自分で出来ることというのが結構大きい。ちょっと国外になるとリスクが高いと思うが、国内であるとそれぐらいのことであれば高校生でやってもおかしくない。こういう修学旅行を含めた教育活動を

行う時に良い目の付け所というのがあって、山本先生の書かれている東京研修というのはすごくいいことだと思う。具体的に色々な先生方も含めた、あるいは生徒で考えるというのはとても楽しい。「先生、こういうところへ連れて行って欲しい」などの声もうまく入ると大変面白いと思う。

木村会長

これだけお金使って海外に行って、女子が多いというのは理解できる。ぱっぱと動くのは女子である。一緒に行かれた先生方の話を聞きたい。生徒は旅行で遊びのように行っているのか、本当に何かを学ぼうと感じで行ったのか。行った結果どういう風になったのか。企業見学でも大学見学でも一緒だと思うが、こういう年齢の時にそういう事に参加するとすごいインパクトがある。その子の人生にすごい影響をおよぼす。一度海外に行ってそういうものを見たら、一生の方針が決まってしまう。「将来海外でこういう事がしたくなった。だからこの大学に行く」というように道が決まるくらい感受性が強い年頃でもあるので。オーストラリア研修にいった子供たちはどうなんでしょうか？

山本首席

引率の先生が満足されていた。前の学校でも連れて行った経験のある先生であるが、「海外研修の付き添いでこんなに楽だとは思わなかった」槻の木の子はしっかりと聞くし意欲があるし力があるかないかは別として事前研修で意識を高められたというのが良かった。20人の中で集団意識が出てきたのが良かった。これが教育効果を上げた。ここの集まりではなくて、いつの間にか結束が生まれて、教育効果があがった。ということは言います。だから業者さんだけでなく引率教員がいたほうが絶対良い。手間は掛かるがせっかくやるのであれば絶対良い。そこの声のかけ方が大切で、毎日学校に行く時に一度集めてミーティングをしてから出掛けて行く。

木村会長

先生が仰っていたみたいに、行きも調べる帰りも調べる。せっかく行く時に自分たちで参加させるということ。どうしてもツアー会社に任せると、手取り足取りカリキュラム通りスケジュールを押し込んでいくようになってしまう。そうすると付いていくだけの海外旅行に行って終わりのようなものになってしまうので、是非研修の折には冒険ではあるが何かやらせる、考えさせるという課題を少しずつ増やして行って、自信をつけて帰ってきて欲しい。

山本首席

ささやかではあるが、もうすぐ京都大学に行くが現地集合にする。

木村会長

経験させるということですね。

竹下校長

山本先生が相談してネクストステージが現地集合ということに。海外は少し置いておいて。それで行こうと言うことになった。やはりそれが出来るようになってきている。

山本首席

東京研修で現地集合できますかね。

木村会長

ちょっとしたことでも出来たら自信がつきます。

宮坂委員

私の中学校の時に研究指定校だったが旅行に行く時に研究で中学生が何をやらされたかというに関西に来たが現地集合という訳ではなかったが、こちらに来てからは自分でプログラムを作って各グループで見学し、後でレポートを書く必要はあったが自分たちで計画した。中学生でも出来ると思う。だから現地集合というのも1つであるし、事前に決めたプログラムを自分たちで見所を調べたり、学習したりして作っているものもある。

北山委員

本当に勇気がいることだと思う。でも力になるし良い経験が出来ると思う。2年生が嵐山に校外学習に行ったが、その学年は現地集合した。フィールドワーク形式にして「高槻駅を通過」などチェックをして、必ずポイントに教師をつけたが、私としてはどきどきした。出来ると思うが道中で何かあったときに対応が出来るかどうか。安全に対して心配したが無事に全員帰ってきた。

4. 各委員よりの提言

北山委員

進学指導に関しては夏休み前の3者懇談会から夏休みにある学校説明会やオープンスクールへ必ず保護者の方へ行ってくださいとお願いしている。出来る限りたくさん経験して見ていただいたほうが納得のいく進路になる。結構保護者と一緒に説明会に行っている者が多い。公立高校に関しましては先週府下でゼロ次調査、府教委の進路希望調査があった。大卒も各学校の定員を決める調査である。今の時期はなかなかどの学校だというのははっきりとしたものは持っていないと思うが、そういう希望調査は始まっている。10月11月はいろんなオープンスクールや体験授業がかなり私学を含めて多くなってくる。やはり先ほど言われたようにこちらとしては進めていってほしい。本番が近づいてきますがよろしくお願いします。

芝井委員

いろいろなデータをいただきまして、しっかりとやっておられるなというイメージがある。私は今日で最後ですので言う事は無いのですが、1つだけ申し上げますと、ネクストステージとの関わりで、どこかの学校に頼まれて15人ほど大学生を連れて行った。ベトナムのハノイへ1週間くらい行った。向こうの学生との交流をした。地理学関係の教室と交流をして帰ってくるというもので、そのお世話係をしていたのだが、ドクターの女の子が「先生、今回は頼まれたから来たけど、次回は絶対いやだ」と言ってくる。理由を聞くと「細かいことを気にしすぎる」と言っていた。つまり一番困ったのは食べ物で、衛生状態もあるが感覚がぜんぜん違うので見たとたん物を食べない。中にはそのようなこともなく食べる子も居ているが、15人中10人程度が

そのような状態である。それではどうするのかと言えば、町の中で少し物を食べたり、あるいは町の中で知ったような店があるとそこで物を食べる。だから実際向こうで屋台がたくさんあるにもかかわらず、ほとんど味あわずに帰ってくる。向こうの子は「あの子らはおかしい」と。私も随分と説得したのだが食べない。それを聞いて思ったのは片方ではしっかり勉強しているし身体も作って大学に行って自分の興味のある勉強して社会に出て行くのだけれども、ある種の逞しさみたいなものがない。だから考えていかなければ。逞しさと言うのはどのような形で育まれるのかと知恵を出して考えていかなければいけない。先ほどのベトナムに連れて行った大学院生の女の子の話で、ある種の逞しさが社会としても必要とされるであろうと強く思う。

木村会長

私は学習面についてはまったくの素人なので単なる父親としてしかお話できないが、いつも気にしているのは、勉強は良く出来るけれども…というのでは、社会に出てから躓くことが非常に多い。当然、私の会社の社員でもそうであるが、いろいろ交流ある他社の新入社員の話をいろんな社長から聞くと、皆言う事は同じである。守られて、オブラートに包まれたように、真綿にくるまれて育てられたのは良いけれども、急に社会に放り出されて、あまりの厳しさにびっくりして目を剥いている。当然、超有名大学を卒業していながら、就職して3ヶ月で辞めている子がいると聞く。時代だと言えばそれで終わってしまうが、私は若い人に接する機会があったり、PTAをやっているなかで、お母さん達と話をする時に特に心の問題の話をさせてもらう。母親が子育ての中心になってから子どもは変わったと思う。父親が威厳を持っていた時代から母親が強くなって、子どもがお母さん感覚である。お母さんは細かいことを気にしなければいけない「時間守りなさい」「早くしなさい」「早く起きなさい」「勉強しなさい」などを言わないといけない。子どもは確かに言われたようにはするが「逞しさ」とか「凶太さ」みたいなものは本来父親が教えていなければいけないことが欠けている子が多い。お母さんたちに日ごろそこを勘違いしていると指摘している。子どもを育てているつもりかもしれないけれども、お母さんが安心したい形にやっているだけ。子どもの将来のためになっていない。お母さんが安心したいからそのようにさせているだけと指摘すると何も言えない。勘違いしたらダメで、今の世の中と私たちが育った世の中では時代が変わっているので、今の世の中にあわせて子どもを強くしていかなければいけない。頑張る勉強できる順番が出世する順番ではない。極端に言えば自信が強い子の順番が出世する順番だと思う。いろんな所でそのような話をさせてもらっているが、あまりにも対象が多すぎて追いつかない。でも1人1人と伝わって行って変わっていかうとするお母さんが出てきているのも事実です。草の根的な活動ですが少しでもお母さんから勘違いを辞めていただいて、お父さんにも話をさせていただいて本当の子供の将来のために家庭作りをしてもらえれば、学校はその補足でしかないのだからそこが大切だ。私はPTAの活動も残り半年なので残念ですが、出来る限り協力していきますのでよろしくお願いします。

田中委員

オーストラリアという話がありましたが、どの地域に行かれるのか？

山本首席

シドニーです。

田中委員

ずっとシドニーに行っているのか？

山本首席

今年からです。

田中委員

非常にこちらの取り組みに関しては素晴らしいなとしか思いつかない。昔の島上高校のときから拝見していて、過去から見ているとここに来さしてもらってから中身が見えるようになってきたのであるが本当に良い取り組みをされているなど実感している。前任の柿原さんから「違うで」とお聞きしていて、期待をして来た。本当にその期待通りの先生方中心に竹下校長先生以下本当に一所懸命取り組まれて、頭が下がる思いです。PTAの会長も本当に熱心で話を聞いていて凄いなと感じる。いろいろな取り組みのなかで少し気になっているのは、子どもたち自身が将来的に実際に社会に出てどう活躍するのか、自立して出来るのか。その過程を作るのにどうしたら良いのか？その仕掛けがここなので教育面も生指面もいろんな面できちりと育てていただきたい。前回にも申し上げたが、挨拶とかしつけの教育は芸や作法に私はうるさいものでそういうことがしっかり出来てこそ次のステップに上がることが出来る。それが欠けているのがこの生徒たちは今話を伺ったら十分に出来ていると聞いていたので、それが他を見るとそうではなくて言葉遣いも悪いし、非常に品がない。そういう部分をきちりと更にこの槻の木高校を作るにあたっては昔の姿勢を養っていただきたい。教職員の先生方のお力が大事かと思う。その辺をしっかりと固めていただけたら素晴らしいかと思う。ちなみにオーストラリアには5、6回行っているが今年の11月に高槻市長と行くのだが、私の子どもが小学校6年からモンゴルに連れて行っていた。それから毎年アメリカやカナダに連れて行っていた。それがきっかけでいろんな所へ行って、結婚してアメリカへ行っていますが。小さい時に連れて行ったことが刺激になって凄く良い感じで何でも自分で調べる。今の時代になってパソコンを使って自分で調べて、大学もどうしようかと悩んでいた。アメリカはちょうどテロがあったので、とても親として行かせられない。自分で南半球のニュージーランドへ行ったという経緯があった。そこまで段階を持っていろんな経験を積んできたのでそれが出来ると思った。中学校からもいろんな体験、経験をどんどんさせて、良い過程を作っていただいて、より良い学校づくりを進めていただきたい。

宮坂委員

学校説明会は基本的に次の世代にこの槻の木高校というものを残していくために、学校の先生方も大変であるが、学校の先生方にどのような能力が問われているかということをおさえておかないといけない。これからは学校の先生に対するいろいろな問題が出てくると思うがポイントは、今までは技術的に熟達していれば良かった。熟達するためにどうすれば良いのか。たとえば強化力であるとか学校力としてシステムをどうやって作っていくのか？方向をどうするのか？どうスキルを高めていくのか？そ

ういう部分が組織マネジメントの中心になっていた。これからは中教審では「反省的な実践家」になりましょう。私がいろいろな学校の実践とかこの先生方のこれまで取り組んでこられた実像を見て、ルーティンではなくシステム。そのつど生徒に見合った形に組織全体であるいはこれからの学校の見かたにあわせて変えていく。方向もそうであるが、方向と言うのはいわゆる形式的、形式知悉な知識やそういう部分の方向というものがあるが、暗黙値の活用を大切にして欲しい。スキルだけではなくて学校としてのビジョンはどうなのか。ひとりひとりのビジョンはどうか。学校としてのミッションはどうなのか。もしくはミッションはどうなのか。学校としてのパッションはあるのか。先生方のパッションはあるのか。この3つがアクションに結びついているのかどうか。今の槻の木高校ではあるが、今後もこういうものがあるのかどうかということである。単に技術的に熟達しているだけで良いのか。形式的にルーティンのシステムとか方向とかスキルだけで良いのかということではなく、そうではない部分を大切にして欲しい。そのキーワードは自立である。自立した教員であるのか？自立した組織であるのか？自立と言うのは固定化されたという意味ではなくて、起業していかななくてはいけないし、そういう意味での自立が必要。自立した組織になるよう続いて欲しい。そのために何を良いのかというのは次の働きかけではないか？ということを感じる。